

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

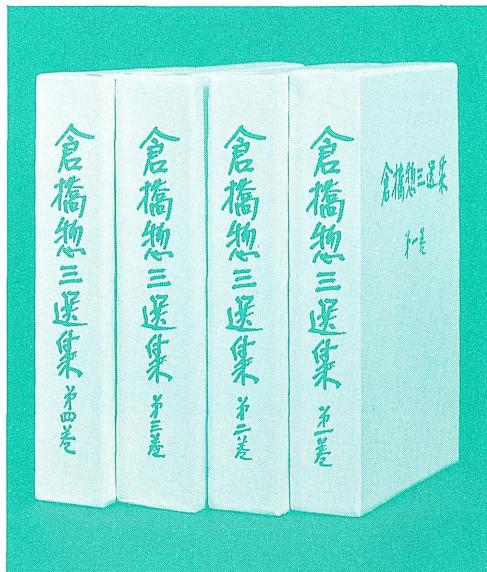
1989
4



第88巻 第4号 日本幼稚園協会

倉橋惣三選集〈全4巻〉

B6判 上製本ケースつき



東山魁夷装丁の
美装本!!

わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・隨筆などを集大成した定本です。今でも保育界において読み、語り継がれています。保育者にとっての座右の書です。

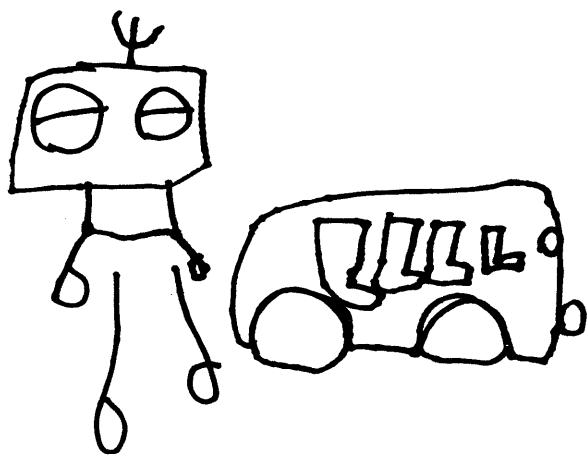
第1巻	幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル/416頁/定価2,000円
第2巻	幼稚園雑草/448頁/定価2,300円
第3巻	育ての心・就学前の教育他/472頁/定価2,400円
第4巻	保育案他/456頁/定価2,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第88巻 第4号

幼児の教育 目 次

—第八十八卷 第四号—

© 1989

日本幼稚園協会

△巻頭言△

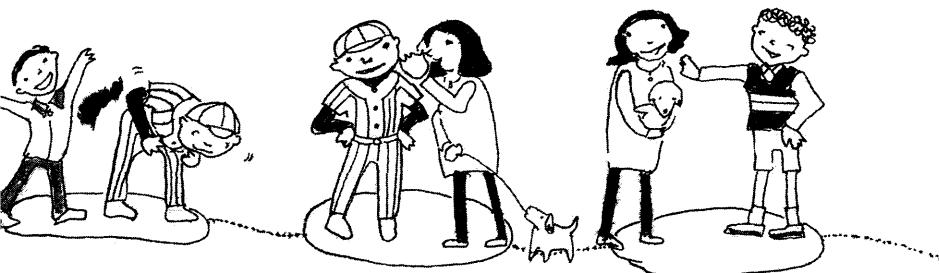
国際化時代の幼児教育……………莊司 雅子…(4)

容器から水をうつすこと……………津守 真…(6)

保育の原点を探る……………土屋とく編…(13)

倉橋惣三「保育法」講義録 (四)

子どもと遊びして——共に学び歩む……………田山 治子…(30)



幼小連絡と生活科

長坂 利厚 (38)

臨床の現場から

私の出会った人々 (一) 安島 智子 (44)

保育の難しさ ～三十三年目の驚き～ F・M (52)

若いお母さんたちへ

子どもと共に参加する保育 村尾美保子 (56)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

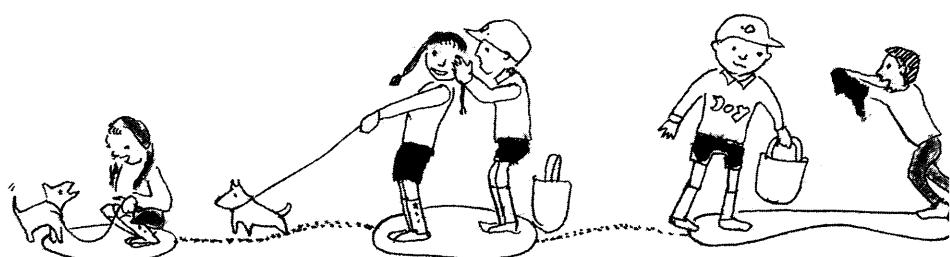
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／村山 英子

上坂元絵里

編集部・向山 陽子 大沢 啓子



国際化時代の幼児教育

莊司 雅子

OME P（世界幼年教育機構）の世界大会が、本年七月十一日から十四日までロンドン大学で開催される。この学会は、三年毎に世界各国で開かれ、乳幼児の保育と教育にかかるすべての親、保母、教師、行政官が各国から参加して、世界中の乳幼児の幸せと健全な身心の発達のために、保育や教育の方法と内容と行財政について研究し、討論する国際学会である。

世界大会以外に、世界の各地域でもセミナーが開かれている。本年は、OME P日本委員会の主催で、アジアセミナーを四月二十八日から五月一日まで西宮市にある聖和大学と大阪国際交流センターを会場にして開催されることになっている。セミナーの主題は「ア

ジアにおける保育の相互理解と発展」でアジア地域から十か国、約五〇名の参加者が予定されている。

国際理解と平和教育は、かねてからユネスコが強調しており、実験学校をも指定していたが、すべて中等教育の段階で行われてきた。しかし、国際理解と世界の平和の問題は、幼児期から始めなければならないことをOME Pは主張している。幼児期から平和の心を育てることによって、戦争や紛争がある程度避けられる。そのためには、幼児期の保育や教育の内容や方法を国際的な視野から考える必要がある。

平和の心とは自己を愛し、他人を愛し、自己を敬し、他人を敬し、他人と仲よく協力し、協調し、相手

の立場を理解し、思いやりをし、そしてゆずりあう心である。この平和の心が育てられていれば、たとい個人間や国家間で紛争が起こっても、すぐ戦争や暴力に訴えて解決するのではなくて、話し合いや討議討論によって解決することができる。平和の心を日ごろから抱いている人が、政治や経済や外交にたずさわるならば、少なくとも国家間、民族間の争いは少なくなる。

平和教育とは一人でも多くこのような人間をつくる教育である。

ところがその平和の心を育てるには、まず乳幼児期から、親や家族の間で、保育所や幼稚園で乳幼児の発達段階に応じた教育の内容と方法で行われなければならない。たとえば、まず家庭で親子の愛撫の情をもつて、幼児に安定感をあたえ、兄弟姉妹間の思いやりやゆずりあいの態度をしつけることから始める。そして保育所や幼稚園では保母や教師が絵本や物語りや遊びを通して友達と仲よくし、協力するように導く。さら

に幼児の理解できる範囲内で外国の友達と仲良くする。言葉や皮膚の違う異国の人々を理解するよう教材や保育の方法を研究しながら、幼児に国際的な感情や感覚を養うように心がけるのである。こうした国際的な感情や感覚が養われれば、成長した後、外国の人々の生活を理解し相互に協力する心が育てられる。

このように幼児期の保育や教育を、従来のように単に自分の家、自分の社会、自分の国に役立つ人間の基礎づくりであると考えるのではなく、もっと国際的な立場で他の民族や他の国民を理解し協力する人間の基礎づくりであると理解しなければならない。これがやがて人類の幸せ、世界の平和をもたらす人間を生み出すことができると思う。われわれは、目下、二十一世紀を動かす子どもを育てている。この子どもたちに今から平和の心が育てられておれば、二十一世紀は少なくとも二十世紀のような血なまぐさい世紀にならなくともすむであろう。

(日本保育学会会長)

容器から水をうつすこと

津守 真

子どもがひとつの行為にひたすら没入しているとき、子どもは無意味にそれをしているのではないと思う。養護学校の子どもはことばで表現しないので大人に分かりにくいいのが、だまつて水をいじっているときにも、いろいろの感覚や思いがあるようだ。ある機会に、同様の行為を別の子どもがしており、しかもそれが強く子どもの心をひきつけているのを見ると、その行為は、子どもが人間となってゆくのに共通に大切なものを含んでいるのではないかと考えさせられる。普通にはただのいたずらや偶然と考えられて、そのことの価値が見逃されやすいが、子どもによつては長い期間かけてゆっくりとそれをするので、だれにも大切な部分を浮き彫りにみせてくれるのである。

三歳の子どもが心からたのしむ遊び

昨年の暮に、私はもうじき三歳になるS子の家を訪ねた。私はしばしば遊ぶ間内なの

に、その子は風邪をひいて元気がなく、母親の傍を離れなかつた。私は母親とおしゃべりしながら、なかばその子の相手をしてしばらくを過ごした。クリスマスによそから頂いたミニハウスに、人形を入れたり出したり、御馳走をつくつたり、三歳の子どもは流暢にしゃべりながらあそんだ。しばらくしてテーブルの上でおやつになつたが、S子は私にひとつおいて隣の椅子に坐るようにと指示する。母親がコップにお茶をつぐと、アツイからもうひとつコップをくれと言つて、大きさの違う柄つきの容器をもらつた。はじめのうちはアツイからさますという理由で、お茶をもうひとつの容器に移しかえ、またもとのコップにもどすことを何回かくり返した。そのうちに分かつてきことは、アツイからというのは表向きの理由で、容器から別の容器へと水を移しかえるのが面白いことだつた。そうなると子どもは口もきかずに熱中する。はじめのうちはコボレタと言つてゐていたが、だんだんに机の一角は水びたしになつた。この遊びに比べたら、ミニハウスでお人形に御馳走を作つたりねかしたりといふ私との間のあそびは、子どもの方が私の遊びでのパターンにつき合つてくれているという感じで、これほどに自分を打ちこんでやつてゐるとは思えない。十五分ほど熱心にやつたあと、S子は私との間でゆつたりと過ごすようになつた。もう隣に坐つてもおこらない。風邪をひいた冬の午後のひとときを、この子は満ちたりて過ごしたと思う。

冬休みが終わって三学期最初の日に、養護学校の門から入ってくるところに私と出会ったN夫は私の手をひいて部屋に入ると、すぐに流しにきてプラスチックの大びんに水道の蛇口から水をいれはじめた。それから小さいびんに丁度一杯になるように水を移し、足もとにあつたミニハウスの一センチ立方ほどの小さなバスタブと台所流しにその水をこぼれないよう適量いた。どの位で丁度よいか心得ている。N夫はまた流しにもどると、小さいびんから大きいびんへと何度も水を入れ、一杯になると違う容器へと水を移しかえる。流しにはいろいろの形や大きさのびんがいくつもおいてあって、次々に水を出したりいれたり、えのぐの筆をその中にいれて色水をつくったり、余念がない。

冬休み中、家で台所のなべや容器を全部出して水を移しかえることをやつていて、台所中水びたしにしていたと、傍で一緒にいた母親が話してくれた。一年前の冬には下をむいてひとりで指先をいじっていたのを考えると、この子の心が開けて活動がひろがってきたことが嬉しいと言つた。この子は小さい容器に何杯で大きい容器が一杯になるとということが、ことばで数字を言うわけではないけれども分かっているんだと母親は言う。私もN夫の動作のひとつひとつを付き合つていると、この子は容器から容器へと水をいれかえながら分量を考えているようと思う。ピアジェが言うように、形や大きさの異なるびんに同量の水がどのように入るか自分でためしていると言つてもよい。容器から水を移しかえてあたりを水びたしにしてしまう、大人を困らせる遊びの中に、子ども自身の実験が含まれている。N夫はこの日、手の中に小さな時計と定規を握ってきた。数字を刻んだ時計を

手にしながら、この容器に何杯がこちらの容器に何杯というような数量関係をこの子は途中で考えながら来たのかもしね。そう考えると、付き合っている私も、いろいろの形や大きさの容器を出すことに興味が出てくる。

そのせいかどうか分からぬが、N夫は急に水あそびをやめた。このチャンスにこんなことをやらせようという気が私の心に生じると、それだけで圧力を感じる子どもがいる。そしてN夫は私の手をひいて庭に出た。滑り台を下から上にのぼろうとする。私は滑り台の上にいってN夫を呼ぶと、私の顔を見上げて笑ったN夫は、手にもつていた時計と定規を手放して、実習生にお尻を押してもらい滑り台の上までのぼってきた。声を立てて何度もそれをくり返した。

砂場と容器の遊び

正月になつて風邪もなおつたS子が私の家にきたとき、玄関を入るとすぐに私にとびついた。S子は私と何かをして遊ぼうと思っている。この前、私との間で、容器から水をうつす遊びをゆっくりとしたからだと思う。しばらくして近くの公園にいったとき、砂場でS子はシャベルに砂をすくって容器にいれた。容器をさかさにして型をぬくと砂が崩れた。S子は「モット カタメナクチャ」と言って容器に砂を多めにいれて叩く。水と違つて砂は密度と分量とが関係することを知つている。それからバケツに砂を一杯に入れ、シャベルで少し砂をとりのけ、「モテルカナ」と言う。自分が持ち上げる力と、容器にいれ

る砂の分量との関係を、この子は把握している。食卓の上で容器から容器へと水をうつしかえること、砂を容器にいれて型をぬくこと、こうしたことをくり返しながら、子どもは容器と量、物質の違いなどを身体感覚の水準で試みている。水や砂で遊ぶ子どもとつき合っていると、無言の行為の中にさまざまな感覚や思いがこめられているのがわかる。容器と量の関係はその中のひとつである。

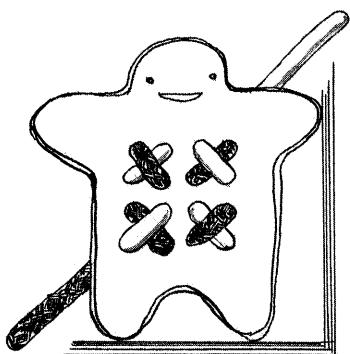
N夫は次の日に、庭で、バケツや容器に水を運んで、砂場に掘ってあつた穴の中にいれることをくり返した。容器の水が砂のくぼみの中に吸いとられてなくなるまでじっと見つめては水をくみにいった。大地という容器の中には何杯でも水がしみこんでゆく。他の子どもたちが数人、砂場で遊ぶ中で、N夫はひとりでそれをしつづけた。バケツに運ぶ水も、自分が持てるほどの分量で水道をとめる。この子どもはもはや容器から容器へと水をうつす行為の中に閑じこめられてはいない。他の子どもたちの容器を使ったり、開かれた場で、容器と大地との関係をたしかめている。

身体行為による表現

私は、三歳のS子が自分らしく活動しはじめたときの行為として、容器から容器へと水をうつすことに着目したのであるが、そのほかにもいくつかこの多弁な子どもが心からたのしむ遊びがあることに気付いている。人を集めること、スコッティの箱から紙を次々に

全部取り出すこと、おもちゃ箱をひっくりかえすことなど、いざれも身体行為による表現である。

いつものようにおしゃべりをしながらままごとなどをした後、S子は正月に私の家に訪ねてきた大人たちをひとりずつ呼んできて手をつながせた。そのうちに、「ミンナ キテ」と言つて全部の人を集めた。一緒に何かをしてあそぶというよりも、みんなを集めることが面白いようだ。これと同じことを養護学校で私は何度もみてきた。いざれの場合も、自分のことだけで思ひが一杯になつてゐる状態から子どもたちの心が解放され、外に向かうようになったときのことである。H夫がひたすら漢字を壁に書かせていた時期を通りすぎたとき、学校中の先生たちをひとりずつ呼んてきてブランコに集めたことがあった。また昨年の秋、T夫がカギに執着しなくなつたとき、実習生や先生たちを集めて並ば



せた。

三歳のS子は、外の世界に眼が向きはじめたようだ。この子は四月から幼稚園の三歳児クラスにゆく。

三歳の子どもは、ことばではまとまりのあることを言っているようでも、心からたのしむ遊びは、ことば以前のさまざまな身体感覺の水準で子どもなりにためし、考える活動であろう。S子は私の家に遊びにくると、まずおもちゃや箱をひっくりかえし、それによって自分の空間をつくってから遊びはじめる。養護学校で、何人もの子どもについて同じことを私は見てきた。そこをぬきにしたら子どもの活動はよそゆきになってしまふ。

養護学校の子どもたちは、一見単純な行為を、長時間、長い期間にわたってくり返す。この子どもたちのことばで説明しないが、身体感覺の水準で、さまざまに感じ、また考えている。ことばを話す子どもたちにとっても、身体行為によつて体験し、考え、表現することがまず基本にある。

(愛育養護学校)

保育の原点を探る

倉橋惣三「保育法」講義録(四)

記録

田村 薫

菊池ふじの

土屋

とく編

一号記載

第一章 幼稚園

第一節 幼稚園の目的 第二節 学齢前の教育 第三節 保育の意義

第二章 保育方法の原理

一、自發性 二、具体性——幼児生活の特色と生活原理

二号記載

保育方法の原理 つづき

第三章 保育法の原則

- 一、間接（教育）の原則
- 二、相互教育の原則
- 三、共鳴の原則
- 四、生活に依る誘導の原則

三号記載

第四章 保育方案 第一 保育項目 第二 仕組み

第五章 保育項目

一、製作

表現とは、その活動の結果が、或る形をそこに現して来る事である。これも生命の一つの発露ではあるが、この表現活動の中にも、自身自身を以てする表現と、物に表し来る表現とがある。自分を以てするにも、言葉で以てするドラマや、音楽、話、語らい等がある。内面的のものを表す為のものである。

表現とは、必ずしも人に伝える事をのみしない。自分のものが外にでて、何かまとまりのあるものにし度い。人に伝える前に内面的のものが自分自身にわかるのである。ここに伝達と違った眞の意味の満足がある。自

分の芸が身にしみる。たまらなくなる。

伝達の目的にあらずして、自分の身で満足しているのが、幼児の自己への表現である。

自己への表現と云う事は、とりとめのない事である。だから客観的行程を経て、改めて自己満足を得る。

例えは、自身の心の中にあるものを、一度形に現して見、それを改めて感じて自己満足を得る。これは実物、必要に迫られてなすものではなく、美的なのである。必要と云う感じを置かずに物を造る為には、普通の誘導は、課業的、練習的、稽古的なものである。併しこれ

は生活的でなく方法的である。そこへ芸術的と云う事が考えられる。

「生活的誘導」

一、芸術的誘導

イ、子供には、芸術的製作衝動と云うものがある。子供にこれが湧いて来るのを、待っているのである。そして、この機に応じれば、これこそ最も純粹な芸術的誘導である。

昔は、課業的、方法的誘導の無理、不自然な方法があつたので反動として出て来た。課業的、教育的誘導の無理を除いたのが、この方法であるが手をこまねいて見ているのみではいけない。こちらから誘導せねばならぬ。

ロ、それには、材料、道具を豊かに供する事である。人は製作衝動が内から湧くとは云うものの、物に誘われてやると云う事が多い。

物に誘われて作ると云う事は、人間生活中の大切なもの。

ものである。必要に迫られている場合は違う。幼児の生活の中に、豊かに材料、道具を備えて置けば、自然にこの衝動が起くるのである。

ハ、が、もう一つ、製作を見せて誘導する。

ハ、が、もう一つ、製作を見せて誘導する。

製作に依る誘導である。

a、その中の一つは、製作せられた物である。子供は、それを見て衝動に駆られる。

b、他の一つは、製作と云う生活を見せる。人が製作しつつある所を子供に見せる。

二、産業的誘導

作ると云う事が、その子供の心の必要から生まれて来て見ているのみではいけない。こちらから誘導せねばならぬ。

作ると云う事が、その子供の心の必要から生まれて来るもの。併し一般世間の必要とも異なり、又、どうにでも生きて行かれぬと云うものでもないが、子供自身としては必要感を感じる。自分の心の中のものを投げ出して眺め直してみる。必要感を投げ出したものが目的である。

目的とは、外にあるものでない自分が必要と感じたそれである。

産業的製作は、自己の必要の為に、又、目的の為に作るものと云う。

子供に作り度いと思うと同時に、作らねばならないと云う様な、を感じを起こさせるのが、この誘導法である。併し、自己以外のものに結びついている様な必要ではない。（例えば先生の命令、しないと叱られる）

課業的のもの多くは斯様なものである。自己の感じた純粹な必要感が動機なのである。実際に於ける、この様な誘導とは、

〔例一〕

人形を子供に与える。子供は、その人形の為に種々のものを作り度くなる。その場合作らねばならないと云う程ではないが、作ってやり度いと思う人情、やさしみと云う様な気持ちが働くのである。

この場合、目的と云うハッキリしたものを、投げ出し

てゐるのではないが、只、自己の必要感で作るのであ

る。

故に半ばは芸術的と言い得る。が、この人形が、もしご同のものであった時には、この情味は湧かぬであろう。親身に世話をすることもなかろう。

一人につづつの人形を与えてやれば、子供は親身に思い、人形を見ては、ほのかな必要を感じて色々と作つてやり度くなる。そこで人形を扱わせつつ、製作をすると云う誘導が出来る。

人形中心保育である。が、製作に都合の良い人形を与えるが良い。（例えば、本当の大きさ、裸のままいる等）

〔例二〕

先ず、玩具屋、果物屋を作るのだと言つて、目的を明らかにして、その目的を目指して、色々と作らねばならないと云う様な必要感を感じさせる。Project Method

目的を本体とし、目的を目指して次から次へと作つて行くのである。

之は、芸術的誘導に対して云うのでなく、子供に目的

等を少しも明かさず、ただ練習的、課業的、技巧的であった従来の製作に対して言い得るのである。

但しこの場合、自分一人ではなく他の者とも一般共通した目的であるべきで、いわば社会的なるべきである。

故に他人が見ても「あれ」と合点がいかなくては。但し之は、前者と比せば、要求が多いのである。

幼稚園は理論に於いてはプロジェクトにされるべきはあるが、実際に於いては目的と云うより、完成されてからの遊びを頭に浮かべさせてやらせるべきものである。

斯様にして製作を生活に入れていく様にするが、この事は、製作者の態度如何によるものである。併し、又、製作者ばかりの態度のみでなく、作られたものが、そこ出來て来る。即ち作品である。

2、作品に於いては（その差異、効果、価値）生活の必要から作られたものだから、象徴的では役に立たぬ。

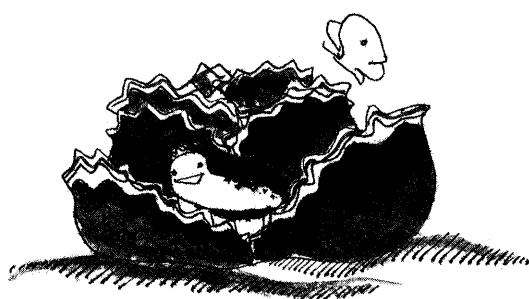
故に作品は具体的である。

産業的誘導の保育上の価値

1、態度に於いては生活的である事

この産業的製作が幼稚園で必要な事は、生活的である

形だけ、見掛けだけの作品であってはならない。その形は実体的であり、且つ子供の持つ観念に沿つてい



る。

回る独楽、かぶれる帽子、めぐる風車でなくてはならぬ。保育とは先々にまで考え及ぼすのではなく、その場の生活に入れていくものである。

分解的、練習的の結果、技巧に於いて見かけによつて、如何に立派なものが出来たとしても

実用に供せぬとあれば、具体的の作品とはいわれぬ。

〔例〕 「ここに木の実が二十もあります。手に持つていても、こぼすといけない。ちり紙に包んでも破れそです。」 こう言つた場合、子供は「よし破れない丈夫な袋を作つてやろう」と言うだろう。出来た袋は、

貼り方に於いて、切り方に於いての技巧は、かえり見られていないけれど、ただ底の取れぬ木の実の二十が大丈夫は入る袋なのである。

こうして産業的誘導をなし具体的の作品が出来るであらう。作品の見掛け、外形を主とするのは、象徴的。それが実用にさるか、又は役立つと云うのは具体的の作品なのである。

斯様に作品に、具体的“味”を持たせる事、之が誘導の主旨である。

外形、見かけ製作に対し、之を実体・具体製作と云う。之は実物と寸分違わず（勿論出来る事ではないが）、作ると云うのではなくその物の本義、觀念等をとり入れて製作されれば満足なのである。

◎此の誘導の教育全体に於ける意義

更に大きな問題としては、目的を以つて作ると云う事に依つて、目的ある生活の訓練、教育が出来るのである。

人間生活を大きく三つに分ければ、

- 1、は命令を受けて機械的に動いている生活
- 2、は自分でやっているが、ゆき当たりばつたりの気まぐれ生活
- 3、は目的生活である。

子供は内部の衝動や、外部の環境に動かせられるから、気まぐれである。故にきびしい目的生活は、不可能の

である。

併し、その生活の發動に於いて、目的的であると云う事は、幼児の遊びに見受けられるところである。發動に於いて、そうであっても、結果に於いて必ずしもそうではないのが常であつて、そこで、遊びと云うものの氣楽さが存するとも云いうる。

その様な生活に、結果に於いて目的的なる様に指導を与えれば、この目的生活を訓練する事ができる。

製作は、この点に於いて最も効果的なものである。

以上は製作そのものに於いてではなく、教育と云う全体的なものに於ける意義である。

目的生活に於いて、初めて人生の意義が生れる。

目的生活に於いて計画が生まれ、完成の悦びが生まれ、自己が成長していくのである。人生陶冶である。

幼児にこの生活をさせる場合、目的も、計画も、生活

も、具体的であると云う事に価値がある。故にこの誘導は、生活教育に有効なのである。

目的と云うものを中心に動いていく保育こそ有意義。

○如何にして指導していくべきか。

1、子供自身の有する目的的活動興味を、この製作に於いて完成させてやる。

大抵のものが先生と生徒との共同なのである。勿論生活主体は子供であるが。

幼稚園に於いては、子供の単独製作の成績を重視する事をなすべきでない。子供を手伝つてやつたり、子供に手伝わせたりしていく。

何を手伝つていくのであらうか。何故技術を手伝うのだろうか。もし製作が技術だけのものであつたら、手伝うべきでない。が、手伝う事によつて子供の目的実現を計つてやるのである。技術的にのみ効果を得るのではない。折角子供のたて得たプランを實現さしてやるのである。

併し、子供は一人で作つた事にしてしまふ程、先生は子供に手伝つてやると云う感じを抱かせぬのである。

子供が作ろうとしたものを、作り得た悦びを共に悦んでやると云うのが主体である。

子供の作りつつあるそのものを助けるのではなく、作ろうとする気持ちを手伝つてやる気持ち。目的貫徹と共に計つてやるのである。

子供は何度目的を立てても、その目的を果たした事のない様な状態にあれば、子供は目的を立てる事もせずに、自己の生活を捨ててしまう。too much kindであつてはならぬ。手伝い方が容易でないのである。

又、何處に手を入れてやるべきだろうか。

子供の製作を手伝つてやるが、その狙いを誤つていふ事がある。例えば子供の生活の目的興味にあまり象徴的に当たりすぎる。又、子供の個性に依つても骨は違つて来、一人の中も又、時に依つて違つてるのである。

2、目的を出させる様に誘導する事

芸術衝動を起こさず為には、三通りあつた。産業生活に於いても目的を出させる。

大別すると

① その子の環境的影響に依つて、目的的になりかけているものを、はつきりした目的にまで誘導する。

例えば、町を歩くと大売り出しがあり、子供は面白く感じ、やつてみたいものだと思う。目的になりかけている。このなりかけを、はつきりさせてやる。

保育法に於ける季節年中行事も、この事に關係している。興味を目的に置きかえてやるのである。

② 子供をして必要に遭遇せしめる事。

子供の必要感を誘導する事。

部屋の隅に人形がいる。そこで先生が「皆さんは沢山着ているから暖かいけれど、お人形さんは寒いでしょうに」といったとする。子供は、そこで必要感が起こる。

「○○さんは、お休みだけど淋しいでしょうね」と

言えば、子供は葉書を作らねばと必要を感じる。

必要感を促す事、刺激する事は難しい。併し、何時完成するかと云う限度を持たせねば目的とは云えな

い。

自分が自己に命ずる責任感を呪わしく思わない程度

に感じていなければならぬ。

全部の子供が全部同時に同じ目的を持つてゐるとは限らない。併し多勢の中の何人かが必要の切迫を感じると、それに動かされて知らず知らず必要感が発生して来る。

以上の様な偶發的なものばかりでなく、先生が或る程度まで手を入れておいて、後の充実、完成の必要を子供に感じさせて作らせると云う事が出来る。後を残しておくのである。

そして先生を手伝うと云う様な形に迄してしまう。手を出さずにはいられないと云う感じを抱かせる。象徴的目的を出したのでは、子供にしつくり来ない。具体的に子供の目の前に出してやる。そして、それからそれへと必要感を促してやるのである。

以上の様にして目的生活、及び製作に対する教育をしていく。製作して何か出来る。出来上がれば成績的見

地から見度くもなるし、又、子供もそう気にかける事であろう。

併し、ただ如何に巧みに出来ていても、その目的の一義、本義に叶つていなければならぬのである。

子供がトンネルを作る。見たところ如何にもトンネル的である。そこへ開通式とか云つた末端的の事までするであろう。併し、汽車の通れるトンネルでなければ、何でもなくなる。そこで通れる様なトンネルに改めさす。余り厳しくすると、子供には泣き度い気持ちである。

故に裏から行つて子供に満足を与える。即ち通れる様な汽車を探して来て通させてやり度い。

實際として、トンネルを單に作つてゐる子供は、どの汽車を通そと迄は考えていないだろう。これに対しての先生の要件としては、先生は汽車を持って来てあげるのである。子供がそこまで考えていなかつた目的を、はつきりと本物にしてやるのである。子供がトンネルだけを考えて、汽車の事をはつきりと意識していなかつたものを、その本義、本質に基づいて子供の目的を内面的に

浮かび上がらせてやる。

実は持っていた目的を先生に依って、はつきりと浮かび出して貰い、目的生活をより目的生活らしいものにしてもらつたと云う感じを起こさせてやる。

子供の目的を認めてやる知己でなければならぬ。子供の側にいる時、子供達に教えると云う事よりも、子供の生活を心のとどかないところまで到達させてやる知己でなければならぬ。

以上の様な意義を考えて來ると、製作と云うものが決して技能教育でなくて、生活教育に重大な関係を持つていると云う事が、うなづかれるのである。

(以上 第二学期)

二、観察

大正十五年に幼稚園令が定められた。

これは幼稚園令としての本質は、全く新しいものであるし、又、保母の資格、待遇も新たに定められた。

併し保育の実際に関する事に就いては、従来の幼稚園規則と大なる差は無かつた。保育項目も大体同様に規則の中にはあつたが、觀察と云う語だけは規則の中にあげられてなかつた。新たに何故注意されたか。又、如何にして之を果たすべきかと盛んに論議せられる様になつた。

又、他の保育項目とは言葉づかいの性質が異なつてい

る。

例えば、遊戯、唱歌、談話、手技、等は生活の一つの姿であり、形であり、体をなしている名称である。

併し觀察は生活のある特定なる姿、形であるよりも、生活の作用で体をなしている名称と云うよりも、動きを表しているところの名称である。

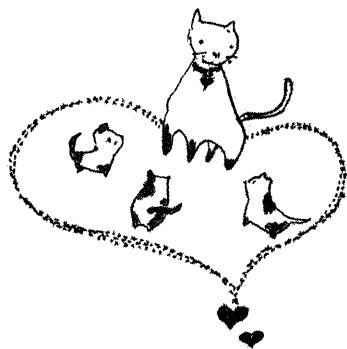
広い意味に於いて考へるならば、觀察は何時、如何なる場所に於いても行われているのである。他のものは始終なしていとは云うものの、する時間は定められてゐるものである。

而も一面より言ふと、理科教授の上に於いて、古くから教育の世界に用いられているし、又、初等教育中極め

何故に保育項目の中に新たに観察を入れて来たか。

必要なものとして加えられるべき理由があるとする。

従来の幼稚園に於いて何等かの欠陥があり、それを補う為に加えられたものと見なす。



- (1) 幼稚園の教育の歴史的全体に於いて、フレーベルの特に幼稚園教育として力説した点は、「活動」と云う事にある。

特にその中でも、外にあらわしてゆく（とり入れてゆく活動より）即ち、作ると云う活動にあった。又、それ以前の教育が受取る（習う、おぼえる）事にのみ偏っていたのが、作ると云う事によって発達してゆく事を新なる着眼点とした事は、もつとも事である。

但し、フレーベル自身に於いては、受け取ると云う事も相當に含まれていたが、それより後、幼稚園は、表現活動の方にかたよる傾向を以て進んで来た。

- (2) 次には、教育一般が理性本意であると云うに対し、情操の教育を重んじなければと云う事が、現代教育の義に思つたりする傾向が出て来る様になつた。

幼稚園の保育上の観察が、その観察（理科教授上のも）と、どう同じであるか。又、どう違うか。新しく出て来たが故に、特に特殊化して用いてみたり、又、無意義に思つたりする傾向が出て来る様になつた。

幼稚園の保育上の観察が、その観察（理科教授上のも）と、どう同じであるか。又、どう違うか。新しく出て来たが故に、特に特殊化して用いてみたり、又、無意義に思つたりする傾向が出て来る様になつた。

情操教育論は、情操教育の方法に於いて芸術教育となつて來た。

この事は特に小学校教育に於いて、あの無味乾燥な固苦しさを擡げるに意義があつた。

幼稚園は元來、芸術的性質が豊かで、今更その新しい主張に急ぐ必要はないのであつたが、そこに二つの理由から幼稚園をして、やはり、その主張に酔わせる様な傾向が起つた。

二つの理由とは、互いに相反した事情である

1、幼稚園の芸術的傾向、性質も、前述の如く作ると云う事に重きをおいているから、同じく表現であつても情操的と云うよりは、工夫的、考案的、創意的であつた。

現代芸術的教育論の主張に比すれば、意志的、理性的の性質を多く持つてゐるものである。

それに対し情操味を加えて行こうと思う事、更に幼稚園が、その理性的意志的な事に偏していくと云うにないでもなかつたら、此に情操本意の芸術的教育

を加える必要のあつた事もある。

2、には、以上の様ではあるが幼稚園の先生達は、観念教育者に比して、或いは音楽、或いは遊戯、又、空想的芸術としてのお話、こういう方面に元来多くの傾向を持つてゐる人が多いのである。

そこへ現代教育主張として、斯様な方面の取り入れが大いに進んで來たから、下地はもとよりと云う様な関係で、滔々として、そちらの方向に流れていく傾向が生じて來た。

これが、歌い、踊り、空想的眩惑美の中の童謡、童話に、とりとめなき美しさを漂わす幼稚園。之が一世を風靡する幼稚園となつたのである。

即ち全く反する反対の事情に基づいて、同様な結果を生んだのである。

さて以上の様な主張の、その事自身が悪いのではない。併し物に即し、事実に正確なる興味を向け、及び、そうした態度に於いて受け取つていく方の生活を発達させる事も、ゆるがせにしてはならぬ事は尤もである。

之が所謂、情操主義藝術の波に漂わされて没却するの止むなきに至つた。

而も又、フレーベル以来の創作本位と云う意味に於いて、幼稚園的なるもの、又、あの奔放自在なる情操と空想との樂園としての幼稚園的なるもの。それに対するものは、所謂知的教育であると考えられる危険が少なくなつた。

それならば、幼稚園的なるものの一つの傾きで、幼稚園そのものを殺す事になる。

情操対観念、藝術対知識でなく、あの情操本意、藝術教育の、ほしいままなる事の持つところから生ずるところ。とめなさ、あいまいさ、不正確、斯様なもの欠陥をその点に於いて補うとするのが、觀察を呼んだ原因である。

ここに於いて養われるは感情であり、又それは大まかなるゆとりのあるものであるが、この二つを見ると、全体が事実から離れている生活と云う事になる。

情操本意、芸術主義的教育でないとすると、すぐに観念的、知識的と云う事を考え易い。
併し、そうではなく單に、子供に知識的、觀念的なる教育をせずして物に即し、事實に正確なる興味を向けざり、なすままにしていてよいものではない。

せる態度に於いて教育する事が必要で、その為に觀察が生まれたのである。

觀察の目的

一、事實感の養成、教育

之は前述の歌とか踊りとかでは、一面に云うならば、感情、気持ちの細やかさ、美しさが養われる。

及び、大まかさ、悠長さ、のびのびしたものが養われる。

も少し物に即し、事実に精密なる心様も持たしてゆかねばならぬ。

が、然し、この浮き々とした感情に対立する一つとして、知識と觀念の法則に基づく思考と云う生活態度がある。この知識思考と云うものは、感情、空想に比し確かなものである。

しかし、この知識思考は、人間の心の働きとして持つており、又作り出すものであつて、その点に於いては事實と離れた関係に於いて感情と同じである。

即ち、抽象的である。感情的詠歎でもなく、思考的抽象でもなく、事実そのものとしての受取り方を事実そのものに對してなす。

その場合に生ずる詠歎でもなく、思考でもなく、事實を事實としての実感、即ち事実感を觀察として養おうと云う第一の主点である。

一輪の花あり。歌にすれば感情的に詠歎すのである。これは花そのものに對してでなく、花の美しさに對し、又、美しさに依つて、こちらから醸し出されて來たもの

が、歌である。その花を知識的、觀念的に精密に調べていく事は、如何にもその事に關して悉しい様であるが、事實そのものに則していくのではない。

故に、この二つを抽象としてしまい、物をそのものとして実感せしめる為に、子供をしてその物に直接せしめるのである。

但し物そのものとして、実感せしむるを以て目的としてそれに止まらねばならぬ。それ以上すすめでは、又、抽象に戻ってしまうのである。

但し子供の想像心理に依つて、童話の中に入つて架空とは考えずに、実感として考える事は確か。人間は事實の中に生活しているものであるから、事實に則する実感に乏しかつたならいけない。

之、觀察の持つ第一目的である。

併し知識とは物に則しているのではなく、抽象なのである。故にやはり事實に則する実感を養わねばならぬのは、人間の殊に小学校の使命である。學問としてはこの抽象でよいが、人間の實際の生活には是非必要である。

事実に則して実感を感じる様にするには、何事にも実感を感じてゆく本来の能力、傾向等を小さい時から養わねばならぬ。勿論想像力、知識も必要ではあるが。この観察の目的を達成する為には、物を豊富におかねばならぬ。そして、折にふれては機会を与えてやる。知識は大したものでないが、見ると云う生活に入れてやる。事実感の経験を幼稚園に於いて与えてやる。そのものは凡て実物でなくてはならぬ。

真物に触れさせる事が何よりも大切な事である。実感を持つ事の出来る様に実感性を養うのが、観察の目的である。

実感能力を有する様になるか否かである。

1、非現実的、空想的、情緒的、芸術的、創作的生活を多分に持つてゐる幼稚園に於いて、余りに傾かぬようと云う為に、観察のある事も一つではある。

2、が、もっと奥底にあるものは斯様なものの対としては、すぐに抽象的なものを持って来てしまい易いから、この対抗として最も必要な観察がもってこられたのである。

而し動植物は、所謂ながめるのである。自分との間に距離がある。故に観察の対象物となるものは、純実用物を除いた実物でなければならぬ。

小鳥を観察するに、小鳥を大切に思うからでなく、子供の之等に対する実感的態度養成が目的である。
但し、小鳥を教えるのが、主ではないけれど、一羽々々に就いて、忠実に観察しなければその実感は起らるものでない。

小鳥を観察すると云う事は、実感を養う手段として重要なのである。

目的としては、实物が主ではないけれど、その手段として実感を養うには、そのものの忠実なる観察なくしては出来ないのである。

その物を物として知らずに、その物に就いてのみ知つてゐる事がある。

前者は *of* (即して) で、後者は *on* (就いて、関して)。

多くの人は本で得た知識を有しているものである。

知識は有しているが、その事実に即しての知はない。

絵は話よりはやや実感に接近している。

観察をすると称して、眞の意味の観察をしていない事

がある。

それに関する知識を与えるのではない。

その事実に即しての実感性を有する事は外形に対しての眞面目さを養う事なのである。

以上を心理作用で云うなれば、

前章では、忠実なる、眞面目なる態度の養成であったが、心理的に云うならば、外界に対する興味を養う事になる。

外の物に対する興味である。我々の興味と云うものは、凡て外界の事物に引き付けられているのである。折角外界のものに引き付けられ様とする興味が、外界の事物なしに過ぎたならば、それは弱まっていくのである。

又、年中同一の物に対するならば、この興味は持続しない。

又、外に向かって興味を満たす事が出来ないなら、内に向かって満たそうとする。

内へ向ける興味が多くなると、外に向けての興味が減じて来る。故に外界の事物を豊かに提供する事は、興味そのものを豊かに発達せしめるのである。

人生に対する興味が青年期の一寸前位にすこし覚めてしまって、無興味時代と云うのがある。根拠のない厭世的態度を取る様になつたりする。

自殺者には死ぬ理由があるのでなく、彼の死を止めるに足る興味がないのである。

前の無興味時代に似た時代が、幼稚園の年長期から小学校の初級に起ころ。

自己の発達に相当する興味に適當な満足の与えられぬ為なのである。

興味はどんどん発達するけれど、之に伴う知識、外界の事物が変わらないのであるから。

故に彼等に活発なる精神活動養成が大切である。

興味を更に心理的に考えて見る。

興味とは此方よりも向こうに対する興味が主になつてゐるものだが、も一つ進めて考えれば、向こうに対する注意ではないか。

興味の養われる一方、注意力が養われるものである。

注意の出来る、出来ないは本来のものであるが、外界の事物に対する忠実性を有するか否かで差はある。

外界に対する注意能力は、話で養われるのではない。

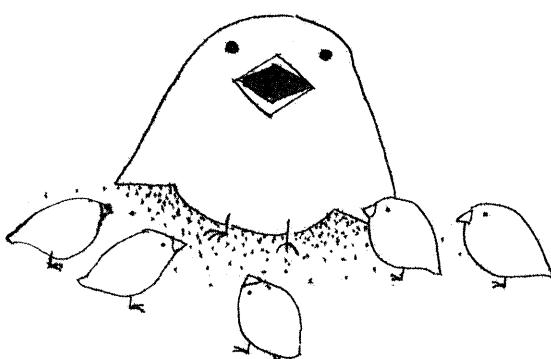
實物にひかされてのみ養われる。

以上のようにして観察すれば、将来無限の知識を受くるに役立つ心的作用を養うのである。

能力の養成、之れ観察の価値である。

(川村学園短期大学)

—以下次号—



子どもの過ごして ——共に学び歩む

田山 治子



月日の経つのは早いもので、子どもたちと出会っても
うすぐ1年になります。子どもたちにとっては、初めて
の幼稚園であると同時に、今後避けて通れぬ集団生活、
それも家族とは離れた生活が始まったわけです。一方、
私も「先生」としては初めての幼稚園であり、社会人と
しての生活もここからスタートしたわけです。
ですから、新学期が始まつた当初は、子どもも私も大
変でした。母親と一緒にいたがる子ども、おうちに帰り
たいと泣く子ども、つられて泣き、甘える子ども、それ

らの子どもたちに囲まれ、まごまごしている私……そんな状態も続きましたし、新米であるがゆえにしてしまった失敗もたくさんありました。しかし、そんな中にも私の小さな進歩を見つけ出して下さる先輩の先生方や、入園後の子どもの変化を喜び、報告して下さるお母様方や、そして何より子どもたちの純粋な目、心に救われ、励まされてここまで来ることができました。

それらをありかえれば、書くことはたくさん出てくるのですが、ここでは子どもたちの様子を中心に、私が今まで感じたことを書いていこうと思います。

三歳の子どもたちと生活を共にして、まず感じたのは、ことばでは伝わらない部分が多いことでした。もちろん、子どもたちはまだ生まれて三年ちょっとですし、これからいろいろ学んでいくのですから、語りの違いなど明らかな理由もあります。けれども、徐々に心が通じ合ってきた過程をありかえってみると、それだけではないように思えてくるのです。

先日、このようなことがありました。降園時刻になつ

たので、トイレへ行くように声をかけていたのですが、トイレをのぞくとまごまごしている女の子がいるのです。いつもと様子が違うので声をかけてみるとどうやら男子用トイレに興味を持ち、そちらでしてみたらいらしいのです。私はどう答えようかと少し迷つたけれども、「どうかしらね、できるかしらね」と言つたまま、その場を立ち去りました。結局、その子は男子用トイレでし始め、途中でうまくいかないことに気づいたけれどももう遅く、パンツをぬらしてしまいました。この子はもう自分でき替えられるのですが、その様子からは、ぬらしてしまったという罪悪感、後ろめたさは少しも見られず、むしろ何かをやりとげた時に得る自信さえ感じられるようでした。

毎日子どもたちと生活していると、この子に限らず、このように自分の力で試してみようとする場面によく出会います。子どもたちは「○○は△△するものですよ」「はい」とことばで、つまり頭のレベルで理解するのではなく、一つ一つを確かめながら実感の伴つた形で、自

分の形に直していくように思えます。自分の足で自分の世界を踏み固めていっているのですから、何事にも揺らぐことのないしっかりとものとなることと思っています。とてもエネルギーを使うことでしようけれど、人間は生まれながらにして、こんなパワーをもっているのですね。一方、大人である私は、そのパワーをいつのまにかどこかへ置き忘れてきてしまったようです。自分なりの裏づけをもって、とり入れ、行動していることがどのくらいあるのだろう、大人に近づくにつれ、増えてくる情報を、他の人がやっているからという安易な理由で、鵜呑みにしたり、真似をして安心し、労力をかけずに済ましてしまっていることが多いのではないだろうか、と考えさせられました。

幼稚園は、子どもたちのこの素晴らしいパワーが十分に発揮できる場となるよう、できるだけ自分で試せる環境にしていかなければならぬと強く思います。と共に、私の忘れていったパワーをとり戻す場にもなってほしいと思っています。

また、子どもたちのこのパワーは、時間を伴つて初めて十分に發揮されることもあるようです。

あまりに寒かったので砂遊びの時、水は使わないことにし、蛇口をきつく閉めていたある冬のことです。水遊びの好きな一人の男の子が、一生懸命蛇口をひねるうとしていたので、「今日はね、とっても寒いからお水はお休みね。年中さんになつた時のプールにおいておこうね。」と言いました。すると、ひねる手はとめないのですが、表情が険しくなりました。私は、その子の手を蛇口からはずしながら、更に説明を繰り返したところ、表情はもっと険しくなりました。私は、納得のいくようにストンと座り込みました。私は、納得のいくようにとしつこく説明をしだしたのですが、当の子どもは私をそして私のことばをも扱いのけるようにして「もうほつといつよ。」と言うのです。私は離れた所で様子を窺うことになりました。

この子はこの時、どうやら自分の心の中で水を使いたいという個人的な気もちと、今日は使っちゃいけないん

だという集団の約束事との間で、折り合いをつけていた
ようです。ですから、とうとうと話す私の説明は、却つ
て邪魔だったのでしょうか。顔にも気もちの激しい戦いぶ
りが現われていて、その様子はとてもいじらしく、つい
手を貸したくなるのですけれど。

子どもたちも入園当初は、もう自分のしたいことが第
一でしたが、友だちと一緒にいたり、何かすることの樂
しさが少しずつわかつてきただ頃から、あちらこちらでそ
の心の中の衝突に必死に立ち向かっている姿によく出会
うようになりました。その様子は、子どもによつて様々
なのですが、どの子もいじらしくまた、急に大きく成長
したようで、たくましくも感じられ、嬉しくなります。

更に、最近特に、遊びの中で生じたトラブルを子ども
たちなりに懸命に考え、解決しようとする姿も見られる
ようになりました。

男の子も女の子もままごとで遊ぶのが好きなのですが、
ある日二人の男の子が「お父さんになりたい」と言
い争いを始めました。私は慌ててその場を鎮めようと、
ようになりました。

► フォークを使ってお医者さんごっこが始まる



お兄さんやお客様など、他の役を勧めたり、順番にすれば、と案を出すのですが、子どもたちの気もちは動きません。途方に暮れていた時、急に一方の男の子が、「じゃあさ、ぼくはここのお父さんだからね。△△ちゃんはそつちのお父さんね」と、意外な提案をしてくれました。相手はすんなり納得、以後仲良く遊んでいました。その後来た子どもたちも同じ方法で加わり、楽しそうに遊んでいました。

「場所によつて分けたお父さん」、大人の私にとっては思ひもよらぬことです。しかも、この「場所」とは、曖昧なもので、ままごとセットのない場所のお父さんも、別にそこで家を作るつもりはないようなのです。お父さんが複数存在できる理由が、当の子どもたちにあれば、それでよいようなのです。実際ふと気がつくと、ままごとの棚のところで、二人のお父さんが仲良く料理を作つていたのですから。



▲パーティーの蝶々さんも参加。「パーティーだよ」と報告する子もいる

また11月には、毎年「お芋パーティー」という行事があります。これは年長組がお芋掘りでとつてきたお芋を焼いて、園庭の「お芋レストラント」でみんなにごちそうするというものなのですが、お芋引き換え券は手作りで、当日も券売り場の係、案内係、コックさん、ウェイトレスさんを誇らしげに演じてくれます。特に、コックの長い帽子や、ウェイトレスの頭の飾りは人目を引くので、それをつけて堂々と仕事をしている様子は、三歳の子どもたちには、憧れの気もちと共に強く印象づけられたようです。三歳の園庭に戻つて来た時の子どもたちは、手作りの券を片手に、ボーッと夢でも見ているような表情をしていました。何人かが、「コックさんになるの」「お芋レストラントなの」と言い始め、砂遊びが始まりました。そのうち「あのコックさんの帽子が欲しい。作つて。」と言いだす子が出てきました。作ろうと思えば作れないこともないけれど、やはり本物



▲お芋パーティー後の子どもたちの遊び

は年長になるまでお楽しみにとっておきたいなという気

もちがあつたので「そうねえ。」「またね。」と、迷いながらもその場凌ぎの考え方をしていました。しばらくして一人の子が、砂を運ぶのに使っていたバケツを頭にかぶつて「コックさんだよ」と言つたのです。他の子どもたちも次々に真似をし、年長組の「お芋レストラン」のように落ち葉を集めてたき火にする子ども、石ころのお芋を集めて焼く子ども、できたお芋とサービスの飲み物を平均台のレストランへ届ける子どもなどが出てきて、多くの子どもたちが一緒に楽しく遊んでいました。

この頃、男の子たちと女の子たちがそれぞれ違う遊びをすることが多かったのですが、この共通の経験が、そして子どもから出た発想が、混ざつて多くで遊ぶよいきっかけとなつたようです。一方、子どもから出てきた「帽子を作りたい」という思いを叶えてあげなかつたことが果たして良かつたのかと気になりますが。

どうやら、大人の堅い頭で考えた方法では解決できなかつたり、子どもにはしつくりいかない事も多くある

ようです。

このように毎日が、戸惑い、驚き、喜び、後悔の連続ですが、これ程までに心のメーターナンバーの針がピクピク動く生活は、子どもと共に生活しているからこそのことです。とても幸せなことだと思います。と同時に、子どもたちに感謝する気持ちでいっぱいです。

今後もいろいろな場面に出会うでしょうが、子どもから出てきたアイデアと共に今の私にできる子どもにとつて最も良い方法を模索していきたいと思います。

(洗足幼稚園)

園から家庭へ

ある園のたより 4月

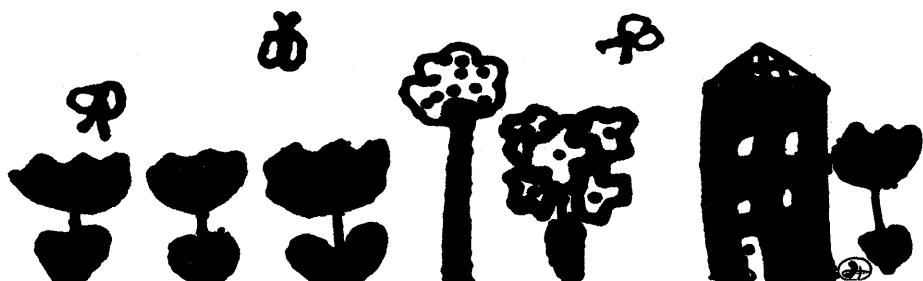
新しい年少組のみなさん、ご入園おめでとうございます。そして新しい年長組のみなさん、進級おめでとうございます。

昨日、幼稚園で巣立ったつばめが南風にのって帰つて来ました。玄関の古巣のいたみぐあいを調べて羽ばたくつばめが、登園して来た年長組の子どもたちに、頭上から嬉しそうに挨拶をしているように見えました。小鳥や木々や昆虫、そして子どもたち、生命のあるものが共に育つ春です。

子どもにとって幼稚園生活の始まりは、新しい社会生活の始まりです。家庭で自然に身につけた信頼という人間関係を、先生や友達に発展させるところです。先生や友達と信頼を深め、自分の思う気持ちを素直に表現できることは、子どもが成長して行く上で大切なことです。共に育つという言葉に、友達と深く係わることの中でお互いに自己を育てて行く、といった積極的な意味を見出したいと思います。大人でいえば、子どもと係わるから母になることができる、といった「自己」と「他者」との大切な関係です。

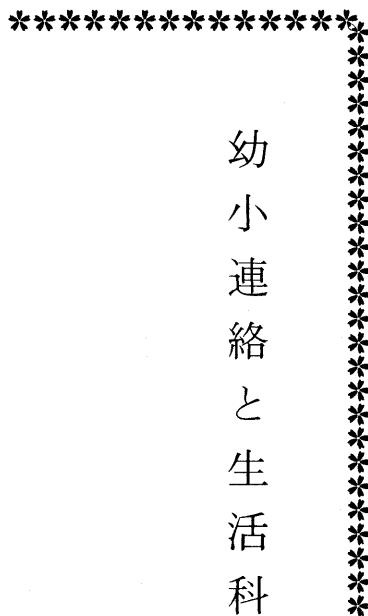
(昭和62年4月10日)

川崎若菜幼稚園)



幼小連絡と生活科

長坂 利厚



(一)はじめに

学習指導要領の改定により、小学校では、従来あった低学年（一、二年）の理科と社会科が廃止され、それに替わって生活科と称する新教科が導入されることになった。

この教科構成の改善は、二十年以上の長期にわたる検討の末誕生したものでもあり、低学年のみならず、小学



校教育全体を見直す重要なポイントを示唆しているものと受け止めることができる。

特に、低学年の教育では、子どもの発達上の特徴（未

分化、興味本位、活動的である等）や幼児教育との連絡等を考慮するなど、子どもを前面におしだした学習活動を組織することが必要になってくる。まさに、生活科はこのような役割を担う中心的な存在であり、その責任や価値はきわめて大きいと言える。

(二) 生活科のめざすもの

次に示すものは、昭和六十二年十二月にだされた文部省教育課程審議会の「生活科のねらい」からの抜粋である。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立へ

の基礎を養う。

このねらいは、これから低学年教育を創る指針になるとともに、教育課程編成上のいくつかの重要な視点（学習の目標・内容・方法）を具体的に指摘している。

① 学習の目標——自立への基礎を養う——

身近な自然や社会に積極的に働きかけ、それらの事象を主体的に受けとめ、自己の力を最大限に發揮しようとする心情・意欲・態度を育てることである。

② 学習の内容

子どもの興味・関心を大切にしながら、身近な自然や社会とのかかわりの中から学習素材を見つけ、それらをもとに学習課題を設定すること。社会生活に必要な最低限のマナー（礼儀作法・公共物の利用等）を身に付けさせること。生活上必要な技能（ぞうきんのしほり方等）を習得させることなどが考えられる。

③ 学習の方法

この生活科のねらいは、具体的な活動や体験を通して

学ばせることを重視するなど、子どもの発達段階や学び方の実態に適合しうるものと思われる。

以上のように生活科のねらいを理解したとき、幼児教育と低学年教育の連絡は、右の②や③の項目を実際的な接点として考えていくことが大切であろう。

(三)児童の生活体験の実態

生活科の単元は、教師と児童とのやりとりの中でつくられていくことが基本である。教師は、目の前にいる児童にどんな活動や体験をさせ、どんな内容をどのような方法で学ばせることが望ましいのかを考えなければならない。その際、幼児教育での活動や体験との接続を考慮することが大切になつてくる。

では、幼児教育では、どのような活動や体験を実際にしてきたのであらうか。次に示すものは、本学附小の第二学年（男児十九名、女児二十名）の児童にアンケート調査（質問紙法）を行つたものである。三十九名の児童

のうち、およそ半数が附幼の出身者である。

（質問1）幼稚園では、どんな遊びをしましたか。

- (1)砂場では、高い山を作つてトンネルをほつて遊びました。（I男）
(2)砂と石でおだんごを作りました。（U子）
(3)動物園がきてくれて、うさぎや馬やにわとりがたくさんきたので、馬に乗つたり、うさぎをだいたりしました。（S男）

- (4)うさぎとにわとりがいました。よく私は、にんじんやはこべをうさぎやにわとりにあげました。すると、うさぎとにわとりは、よろこんで食べてくれました。
(N子)

- (5)おいもほり、ぶどう狩り、どんぐり拾いをしました。

(B子、H子、F男)

- (6)海へ行つて砂で山を作つた。地びき網をみんなでひいたらエイがいました。（D男、E子）

- (7)お花つみをしました。（M子）

- (8)草むしりをしたのをこはんにして、ジャングルジムで

おままごとをした。(S子)

(9) ぼくは、大きいブロックで家を作ったり、車りんのついたブロックをつなげて乗りものにしたりしました。

(K男)

(10) おかしやさんごっこ。山でたんけんごっこ。電車ごっこ。けいさつごっこ等

(11) サッカー。リレー。野球。かくれんぼ。ドッジボール。ブランコ。すべり台。等

(12) 折り紙。たこ作り。おめん作り。家作り。本読み。お絵かき。歌をうたう。体そう。げき。お人形あそび。かけ絵。等

(質問2) 一番楽しかったことは何ですか。

(13) 一番楽しかったことは、十人ぐらいで砂場に水を入れて遊んだことです。その水の中にプラスチックでできた車で遊んだことです。(Y男)

(14) 私が一番おもしろかったことは、うさぎをだいたことと先生がしてくれたかけ絵のことです。(C子)

その他、固定施設を使う遊び。行事のこと。ボール運

動。野外での食事。工作。おままごと等多種多様である。

(質問3) 幼稚園と小学校のちがいは どんなことですか。

(15) 幼稚園のころは、遊びっぱなしだったけれど、学校は勉強する方が多い。勉強の時間と遊び時間がわかれている。(このような内容を書いた児童が多数。)

(16) 幼稚園は自由だけれど、学校は 文を書いたり、教科書を使ったりする。(R男)

(17) 遊び道具があまりない。(J子)

(18) 学校はチャイムがなって、幼稚園ではならない。(Y男)

(男)

(19) 幼稚園では、砂場に水を入れられるけれど学校では、入れてはいけないのでつまらないです。(D男)

その他、校庭が広いことや一人机であることなどをちがいにあげた児童もいた。

(四) 幼小連絡の課題

ここでは(三)の児童教育における児童の生活体験の実態を一つの手がかりにして、幼小連絡（主に低学年の教育課程編成の立場から）についてのいくつかの課題を明らかにしてみたい。

①体験的活動の接続を考慮する。

(三)(1)から(4)の項目が示すように、児童は児童教育において身近な自然や社会の中で、遊びを通してさまざまな活動や体験をしている。

それらの中には、低学年の学習の基礎的な活動や体験になりうるもののが数多く含まれていることがわかる。この

ことから、低学年では児童教育で行つてきた体験的活動を十分生かし、児童が主体的に学習に取りくむことができるような教育課程（特に、生活科の単元づくり）を編成することが必要である。

②活動時間を保障する。

本校では、第三学年から時間割に従つて学習指導を行つてある。そのため、(三)(18)の項目が示すように、低学年の教室にもチャイムが鳴ることになつていている。しか

し、低学年は時間割がないため、児童の実際の活動の様子に合わせて一日の時間を配分することができるシステムをとっている。したがつて、個々の児童は、自分の興味・関心にもとづいた活動を、自分が納得のいくまで取り組める時間的な保障が与えられているのである。一般に、活動や体験を重視した生活科では、活動時間の個人差が著しいことなどから、一応の時間割を設けたとしても、それを弾力的に扱うことが必要になつてくるだろう。

③活動や体験を優先させる。

生活科のねらいの冒頭に「具体的な活動や体験を通して……」と述べられているように、児童や低学年の児童は、何かに興味をもつと、すぐ行動にうつすように、きわめて活動的である。自分の目の前に何か物が置いてあれば、それに興味を示し、教師の指示を待つずに遊んでしまう。また、何か材料を使って製作活動をさせる場合でも、実際の材料を組み合わせるなどの操作をしながらイメージをふくらませることがある。このように、児

童の活動主義的な実態を考慮する時、低学年の生活科では具体的な活動や体験を取り入れて単元づくりを行うことが望ましい。

④生活科の評価。

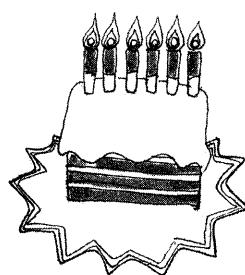
生活科は、教科の一つであるという位置づけがなされたため、その評価について検討する必要がでてきた。本校の低学年の創造活動（総合的学習）は、次の四つの項目を立て、三段階で評価を行っている。

- 自分で課題を見つけ、よく考える。
- 進んで学習に取り組み、はじめにやりとげる。
- 条件に合わせて創意工夫する。
- みんなと力を合わせて活動する。

観点であると考えられるからである。

これから実施される生活科は、学習内容の理解度や定着度を評価するだけでなく、本校の創造活動の評価項目のように、児童の情意的な側面に焦点をあてた評価であつてほしいものである。

（お茶の水女子大学附属小学校）



このように、低学年の創造活動は、知識・理解・技能といった評価ではなく、児童の心情・意欲・態度といった情意的な側面を重視した評価を行っている。それは、これら四つの項目は、あらゆる学習の根幹をなす重要な

私の出会った人々 (1)

安島 智子

◇はじめに ◇

「臨床の現場から」ということで、今月から隔月に登場させていただくことになった。最初の回でもあることなので、余談かもしれないが私が臨床を始めるきっかけとなった、児童学科との出会いをふりかえることから、書きすすめていきたいと思う。

それまで勤務していた高等学校を退職してお茶の水女子大学の児童学科の扉を叩いたのは、もう十六年も前のことになる。「なんとすばらしい所だろう。」当時の感動は、十六年たつた今も記憶に鮮明である。講義が魅力的だったのは無論のこと、何よりもかによりも私を感動させ、驚かせたのは、教官を始めとする児童学科の人々が生き生きしていることだった。私には、それぞれの人が自らの子ども性をのびやかに、恥じることなく、生きて

いるように感じられたのだ。

みずみずしい感性と、旺盛な知識欲と、ダイナミックな連帶と、そこでおきている動きは、児童学の創造に向けて止まない情熱のうねりであったようと思い出される。そんなうねりの中で、私は当時松村康平教授が指導教官であった児童臨床研究室で学び、臨床の仕事を続けることとなつた。

あれから長い歳月がたち、多くの人達と出会い、私の心の内にも自らの子ども性を育むことができたようと思われ、この仕事を続けてきたことを幸せに思う。何故なら、心理療法の仕事というのは、生きて来られなかつた内なる人々を生きさせることでもあるし、とりわけ、生きられなかつた内なる子どもを生かしてゆくことだからである。近年、「大人になれない大人たち」のことが話題になり、同名の本まで出されているが、私はむしろ、「子どもになれなかつた大人たち」と言いたい気がする。充分に子どもを生きることができてこそ、生き生きとした大人になれるようと思う。生きにくさを訴える大

人が、充分に子どもを生きることができた時、生きにくさがいつしか解決していることは多い。そうしてみると人間ってどんな時にも可能性を背中合わせに持ち合わせた存在で、捨てたものじゃないなあと思われるのだ。これから六回、私が出会つたすてきな人達のことを語つてみたいと思う。

◇普通の子になりたかった少女◇

いつもズボンをはいた、言葉使いの乱暴さは男の子のような　十一歳の少女、明子（仮名）のこと

――拒否・くり返されたキヤッチボール・一体感――

最初に彼女に会つたのは教育相談室のロビーであつた。しまのシャツに赤いつりズボンをはいたおかっぱ頭の女の子が、肩を怒らせ、体を斜めにして足を広げ、両手を腰にあててふんばつていた。「ふん、あんたに会いたくて来たんじゃないよ。」とでも言つてゐるかのようなくぐづかれた態度だった。多分来たくて來たわけでは

なかつたであろう。

プレイルームでは、部屋のおもちゃを次々と手にしては、「おもしろくない」、「おもしろくないね」を連発し続ける。何があつても、何をしててもおもしろくない。この時、この「おもしろくない」ということに対し、私は簡単に関わつてはならないこの子の持つある種厳肅な尊厳さを感じ、そつと黙つた。しばらくして彼女は歌手の話が好きだと言つた。歌手の話は次の回にもなされ、やつと彼女が何をしようとしているか汲みとることができたのだが、この時は彼女の話をただ聞かせてもらつてゐるだけだつた。その後、私が天井からつるした風船のところに移動したところ、明子も追つてきて、「これなあに？」とそおつと風船を私にむけて打つてきた。私はその風船を受けて投げ返すと、明子も受けて投げ返してくる。二人の風船のキャラッヂボールが、受けとつては投げ、受け取つては投げ、沈黙の中でくりかえし、くりかえし続いた。距離がだんだん近づき、ボールの動きも徐々に静かになる。二人の間にピタッと呼吸の合う一体感

が生じた。タイムアップ。部屋を出た彼女の顔は満足げで、来た時とはうつて変わつた笑顔だった。

〈ここで、明子が来談することになつたいきさつを述べると、彼女は周りの人達をほとほと困らせていたらしい。暴れ出すと包丁を持ってマンションの七階から飛び降りようとしたり、学校では授業中に立つて歩いつたり、大声を出したり、歌を歌つたりして授業妨害をし、休み時間にかさで友だちをたたき歩いたりするといふことだつた。一人の担任では持ちこたえられず、教室を定期的に変わつていたという。またこんな話もある。クラス写真を写す時、足をガニ股に広げ、両手で目と鼻をつりあげ、舌を長くのばして写ろうとするので何度も注意したが、とうとうその姿のまま写つてしまつたそうだ。ある時は三歳くらいの子どものようになつたり、ある時は全く大人人びたことを言つたりするのでどう理解していいのか、手のつけようがないといふことが大方の大人の一一致するところであつた。〉

明子はここまでして、何を求めていたのであらうか。

——私が求めている私を探す——

二回目のセッションでは、私を見るなり大変嬉しそうな笑顔をした。プレイルームに入るとすぐに歌手の話を始める。

『河合奈穂子のぶりっこぶりは何故あんなにわざとらしいのだろう。ワンパターンだ。こうやってあごをしやくりあげるだけだ。

周りの人があうるさいのだろうか。
性格が悪そうだ。

堀ちえみ、早見優、中森明菜は表情が自然だ。あんなにしていられたらいいな。

自然にできるのはどうしてなのだろう。

周りのスタッフがいいのじやないだろうか』
この日気がついた。歌手について思いめぐらしたり、
歌手の話することによって、明子は自分自身のありよ

うを求めていると。自分のありようを形成していく上でのモデルとして歌手を見、確かめていこうとしていたものと思われた。初日に、「歌手の話をするのが好き」と言つたことは同時に、「私が求めている私を捜す話をしたい」という意味でもあつたのであらう。この日はもう風船の打ち合いをすることもなかつた。好きな男の子には、嫌われることばかりしてしまうし、「ゴミの腐ったみたいたな顔をしている」と語つた自己イメージの否定が「歌手になりたい」ということだったのかもしれない。私が「明子ちゃんも歌手になつたら、明子ちゃんはかわいいよ」と言うと、嬉しそうにして鏡の前にいき、かわいらしく見えるであらう表情や仕草をつくつてその姿を写していた。

明子は思春期の始まりにいる女の子だ。身体の成長・変化にともなう内からのつきあげに揺り動かされ、生育過程における発達課題のテーマがくりかえされる時である。また内的な自己確立と共に、自分の姿や顔だちや髪型を気にしだし、おしゃれに気を配る年頃でもあつ

た。良きにつけ悪しきにつけ家の中にモデルとする人を

持っている他の子どもとは異なり、明子は自分自身がどんな女性になつていきたいのかを描くことは困難だったであろう。だからこそ、いつそう自分を求め、探そうとしたのかかもしれない。「歌手になる」というのは自己完形成像への挑戦とも捉えられる。

このあたりで明子がどんな状況で生きてきたのかをす

こし説明したいと思う。

〈明子が三歳の時に、父親は家族を離れなければならぬ事情がおきた。残された母子は一時母子療でも生活したが、その後兄（二歳上）は父方の祖母に引きとられ、本人と弟（二歳下）は施設に預けられた。来談した年に父親が再婚し、子ども達三人は共に引きとられ、繼母との新しい生活が始まった。繼母は父の仕事を手伝うかたわら、夜はスナックで働き、家の中はかなり騒然としていたようである〉

——「ママ」と遊び・普通の人は——

四日目のセッションの時、「ママ」とセットを用意して



おいた。すこし嬉しそうにしたがまま」と道具に触れようとせず、「普通の人はおままで」とをして遊んでいるで

しょ。私はない」と躊躇する。「お料理のお鍋ませたりするの楽しそう」と言ったとたん、「でもはづかしいな」と言う。本当に恥ずかしそうな表情だ。誰もが経験しているようなことを経験していくなく、誰も恥ずかしいなどと想像さえつかないようなことに、これ程恥ずかしいと感ずる明子にとって普通の子ども達と過ごす毎日がどんなに大変なことかと思った。母親役の私に、「お手伝い何する?」と言つてはみたものの、「どうしていいのかわからないから、やって」と、私が料理をつくるのを見ていることから遊びは始まったのだ。その中で明子はいろいろなことを提案した。

「電話きたことにしようよ」「お母さんに学校に靴をとりに行くって嘘を言つて、友達と遊んでいることにしようよ。たまには嘘もないとつまらないでしよう。」「きようはお父さん。赤ちゃんはじやまだね。寝ることにしよう。やっぱりお父さんはむずかしい。」普通の家でお

きていることを試みようとしたのであるう。

—やさしさの現われ・鈴木君との別れ—

私が他の子どものことで心を痛めている日のことだった。「今日お姉さんどうしたの? とっても悲しい顔してるよ。悲しいのに遊ぼうたつて無理だよ。お話しよう。」「どうしたかは言わなくていいんだよ。悲しいってことだけ言えばいいんだよ。」こう言つて私をいたわるうとする明子のやさしさが、とっても暖かく感じられた。この日、明子はよく話した。そして話をしているうちに、「悲しい時はどうするの?」と尋ねたので、私は、「神様とお話をするよ」と応えた。すると彼女は機を得たように話し出したのだ。「私も神様にお祈りするよ。私はキリスト教……。悪いことをしたら神様にご免なさいって謝るの。悲しい時は神様に言つていると、だんだん悲しさが煙みたいにぬけていくよ。お姉さんどうお?」確かにこの時、私は体の中から悲しさが抜け、淨化されたような感じがした。二人の間に何かが動いたよ

うなそんな感じだった。「今わかった。やっぱり神様はいつでも助けに来てくれるんだよ。今私が話をしているけれど、神様が私を通してお姉さんに話しているような気がするよ。お姉さんと話をしていると勉強になるよ。」最後のひとことがおかしくて笑ってしまったが、明子は眞面目に続けた。「私は赤ちゃんの心も、小さい子の心も、小学生の心も、大人の心もあるよ。」こう言いながら、どの心も自分の心にまとめていたのだろうと思う。そして又「私は辛いことや悲しいこと、いっぱい我慢してきたから、人の気持ちよくわかるよ。お姉さんもずいぶん悲しいことがあつたんでしょう？」と私の顔を見る。私が「わかるの？」と尋ね返すと、「人のこと本当に思うとよく通じるね。私はお姉さんのこと思つてしまっているから通じるんだね」と語った。最初の回の風船のキャッチボールを思い出した。二人の関係はあの時よりずっと豊かになつていて。

次の日のセッションでは、他の女の子を好きになつてしまつた鈴木（仮名）君のことが話された。「鈴木君の

ことは明子が一番思つてることは確かなの。鈴木君とは、後楽園でいっしょにお揃いのブローチを買った程仲良かつたのに。」「ブローチ海に捨てようかな。私ってロマンチックね。」この日はズボンしかはかない女の子の心の中にしっかりとしまわれていた鈴木君とのお別れの日であつた。新しい明子が生まれようとしているものと思われる。

—再びお母さんごっこ・普通の人へ—

ある日、プレイルームに入るなり、「お母さんごっこしたい」と言う。この日は、友達から電話がかかる、電話がかからつても断わる、断わらずに遊びに行く、電話がかかるつても出ると切れる、といった明子の外界への試みが表現された。遊びの中の友人達に名前をつけ、各々ぶりっ子、いやみな子、自然にできる子を、演じてみたり、私らしさを求めることが続く。そして友達と遊ぶ、おしゃべりをする、友達の悪口を言い合う、友達とけんかをするなど、日常ありそうな場面を様々想定して試

みる。新人歌手のオーディションを受けに行つた日もあつた。遠足のお弁当やおやつを用意してもらつたり、遠足

の日は特別に嬉しそうだつた。そして毎回のお母さんごっこで、「私のつくったごはんを一口食べる」とに、「おいしーい、お母さん。」「あつたかーい」と嬉しそうに言うことが続いた。

こうして、ままごと遊びはこの子にとつては普通の生活の体験をさせてくれる遊びであつたし。充分に体験してこなかつたと思われるお母さんと明子の二人だけの世界体験でもあつたものと思う。お母さんがいたので、三人の友人を演じ分け、自分を捜すことができたし、歌手のオーディションを受けることもできたのであらう。そして普通の家の普通の子ども体験をすることができた。後に明子の家にお手伝いさんが来ることになるが、彼女が求めていた普通の人だつた。「あのおばさん、普通の人なんだよ」と私の耳もとできさやいた程、彼女には嬉しいことだつた。私とのままごと遊びは、後にこのおばさんとの現実生活に引きつがれることになつていく。も

ちろん、ままごとごっこ本来の持つ魅力をも堪能したにちがない。

明子は周りの人を困らせない子になつていた。継母も、「とつてもいい子になつたんですよ。本当にいい子になつてね」。もう行かなくていいんじゃないかな」とのこと。最終回には、私に似ているというタレントの写真をくれた。それはテレビ番組に出てくる良いOL、普通のOL、悪いOLの普通のOLをやつしているタレントの写真だつた。

明子の病理を診断すれば、マスター・ソンの言う「見捨てられ」体験を持つ子どもであらう。このことを知つて付き合うことも必要であるが、それはしてはならないことを知つている必要があるということだけで、何をすることが必要かは本人が教えてくれるのである。先人が積み重ねてきた精神医学を知つてることと、生きる力を回復するかかわりができることとは別なことであつて、同時に要求されるものと思う。

保育の難しさ

「三十三年目の驚き」

F・M

この雑誌に、"保育の中の 小さなこと 大切なこと" という題で、保育のことを書き始めたのは、何年前になるであろうか。"おもちゃの取り合いのこと"、"友だちの作つたものを こわしたこと"、"友だちのかいた絵を けなしたこと"、"ひとりで所在なげにしている子どもを、自分から動き出せるように、力づけること"など、保育の中で、直面したいいろいろな問題に、保育者として、どのように感じ、どのように願い、どのように行動したか……それに対して、子どもが、どのようにであったか……など、具体的な場面を捉えて書いた。

当時、いろいろな方から、共感のお言葉をいただいたが、保育者の一人である私の友人が、こう言った。「うまいかなかった例はないの？ そういうのも書いてほしい……」

殊更に成功例をあげた、といつもりはなく、保育者として、問題にぶつかり、迷い、行動を選択

し、結果が見られた、というものが、エピソードとして まとまりを持ちやすいというに過ぎない。

ところで、一昨年から担任をしているクラスで、私は、しばしば挫折を味わった。友人が求めた“うまくいかなかつた例”はいくらでもあげられそうである。

このクラスでは、今まで経験したことのない初めての出来ごとに、いろいろと出会つた。

先ず、三歳児クラスの四月、二十名のクラスの半数近くが、母親から離れず、泣いたり不安そうにしがみついていた。新入のクラスに、四月初め、何人か泣く子どもがいるのはごく普通のことである。しかし、半数近くが、泣いたり、母親を追つたりするのは、私にとって初めての経験で、やつと遊べる状態の子どもをも不安に陥れ、その傾向は増幅したと思われる。

泣いていた子どもの一人は、そのうち、他の子どもと水遊びを始め、砂場の水道を全開にし、掌で押えて水をはね散らすことに興じた。確かに面白いことではあるが、周囲にぬれて被害を受ける子どもがるので、止めないわけにもいかず、止めても、すぐに繰り返す。他の遊びに誘つても、じきに水に戻る。今までのクラスでは大半を占めていた普通に遊ぶ子どもが、このクラスには何人いたであろうか。“電車を貸してくれない”“○○ちゃんが、取つた”“線路を壊した”など、次々と起ること態に追われ、“子どもの中に入つて、一緒に遊び、遊びを楽しくする”という、保育者の役割をとるゆとりもなく、後手にまわつて、振りまわされた一学期であった。

そのような或る日、帰り際に、遊具の片づけや、帰り支度を急いでいると、F夫がバスケットを持って部屋に戻ってきた。このクラスは、今日はおべんとうのない日である。F夫は、帰りにどこかへ寄るために、おべんとうを持ってきたのだろうか。他の子どもの支度を手伝いながら、私は漠然とそ

う思つた。F夫は、バスケットを開け、おべんとう箱を取り出し、蓋をあけた。三歳児は、初めてのおべんとうのとき、昼食まで待てずに、早く開けて見ることがよくある。私も、そのようなことを思い浮かべたが、今ここでおべんとうを食べるのは困る。私が止めようとしたとき、F夫は、中のスペゲッティをつかんで口に運ぼうとしていた。すぐに手を押えて、スペゲッティを戻させ、蓋をしようとして、更に驚いた。F夫のおべんとうではなかつたのである。たとえ三歳児でも、他人のおべんとうを勝手に食べるようなことが起ころとは、考えてもみなかつた。年齢なりの常識の中に組みこまれているように漠然と思つていたのである。私は、自分の判断の甘さに気づかされた。

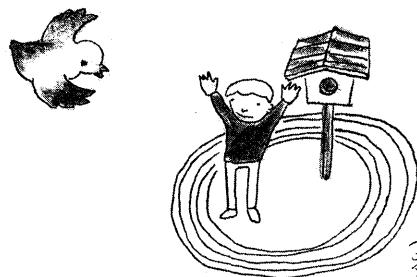
秋のお芋ほりのときのことである。D夫は、"虫が恐い"と泣き叫んで母親の背中にしがみつき、とうとう一度も畠に下りなかつた。虫を恐がる子どもはよくあるが、D夫のような例は初めてであつた。その少し前、D夫は、下に妹が生まれ、母親は下の子どもにかまけていたようである。D夫の不安定な様子は、それから冬まで続いたが、翌年のお芋ほりには、他の子どもと共に土を掘り返し、"虫がいた"の声に、のぞき込むほどに落ちついてきた。母親との関係が、子どもをこれほど不安にさせることを目の当たりに見たのは、私には、大きな驚きであった。

T夫の"玉入れ"も、私を驚かせたことの一つである。例年、運動会では、四歳の競技種目として"玉入れ"をしている。今年も、一週間程前から用意して、自由に玉を投げ入れて遊んだ。T夫も、「僕もする」といつて加わつたが、"自分の投げた玉が入らない"と言つて、泣いて怒り、玉を投げ捨てた。T夫は、おべんとうのときも、"自分が腰かけようと思った座席に、他の子どもが腰かけた"と言つて、他の空いた席には腰かけず、一人で床の上に座つて食べたことがあり、意想外な行動をす

る。

今まで、多くの幼児と出会い、いろいろな子どもの行動に触れてきたが、それでもまだ、次々と驚かされることには事欠かない。初めての経験に驚くということは、それだけ“子ども”というものを知る機会が増えるということであろう。

難しいが、興味深い子どもたちである。あと一年の園生活で、子どもたちがどれだけ変わっていくか、恐いような、待ち遠しいような気持で、時間をかけて子どもたち自身が結晶作用をおこすのを見守りたいと思う。



(お茶の水女子大学附属幼稚園)

❀❀❀❀❀ 若いお母さんたちへ ❀❀❀❀❀❀❀❀

子どもと共に参加する保育

はるにれの会

村尾 美保子

息子のとおるは、今三歳四か月になった。私は以前、発達の遅れた子どもたちと生活を共にしたことがあり、とおるが一歳になった頃から再び、母子でそこの保育に参加させていただいている。現在は週二回のグループで、自分の子どもの母として、またときには通園している子どもたちの保育者として、幼い人たちとよりよく生きたいと願っている。

私が、一歳になつた子どもをつれてこのグループに行こうと思ったのは、日常生活の中で、子どもとなかなかゆつたり過ごせていない自分に気付いたからだ。家事を離れ、子どものペースで生活するときを意識的に持ち、「子どものあとからついていく心」を取りもどしたいと思つた。また我が家は、典型的な核家族なので、外の保育グループに通うことが、二人にとつての社交の場となり、生活に新しいリズムが生まれ、はりあいのある日々を持つるようになつた。

その中で、いろいろな人や出来事との出会いがあり、それらを通して、子どものことや私自身のことを考える数多い機会を得ている。

(母として 保育者としての葛藤)

初めは、ただとおるの母としてグループに参加していったのだが、そのうちに母親という立場の私に、特別関心を寄せてくる子どもたちと親しい間柄になつていった。U君の場合は、私が母親であるということに安心していられるらしく、自分の母親の退室後は、ママと言つてそのイメージを私に重ね合わせてくる。またT君の場合は、特に入園後の一年、私とおるの母と子としての存在がいいらしく、私たちをみつけるとすぐ傍に寄つてきて、同行することを求めた。おそらく私たちのやりとりを見ていて、その観察者としてのゆとりが、人に直接気持ちを向けられるのが苦手であった彼に、警戒なく私共のもとへ近寄る力を与えたらしい。さらにまた、とおるが私にして欲しがることを、自分の母親に真似てみる

ことで、育ちそびれていた母子関係を自ら回復させようとしているようなところもあった。

このようにして、通園している子どもたちとの関係が深まっていくうちに、私の意識の中で、とおるの母としてだけではすまない保育者の在り方が、絶えず問われることになる。一方、とおるの方も、自分だけの母親ではない私に直面することになった。初めは、私がU君やT君に手をひかれ、要求されるのについてきていたとおるが、はつきりとそのことを嫌がり、二人だけでいられる空間に私をつれしていく。三歳になり、ことばで表現できるようになつたとき、「おかあさん いかないで」と言う。U君もT君も、とおるのことを拒否したことはない。とおるの母親だとわかっているので一緒にいることを拒みはしない。それなのにおおるの方は、同じ空間にいることすら嫌がる。U君やT君が、親しげに私の傍に寄ってきて手を引くと、とおるの方は、取られまいと反対の方向に引っぱる。すると、U君やT君もそれまで以上に強く私を引く。そのようなとき、どちらもえらば

ず、ただその時を持ちこたえるだけで精一杯になつてしまふ。三歳になつたばかりの子どもに、ことばで説明して納得させることではないながら、感情的になつて、「お母さんは他のお友だともいつしょに遊びたいのよ。」と言つてみたこともあつた。兄弟を育てている人は、養子も共に育てている人は、このような時を、どの様にしてのりこえていくのだろうかと思う。

(葛藤の中で確認できたこと)

私はそんな日の夜、一人で思いをめぐらしながら、我

が子ゆえにいつも後回しにしたり、我慢させようとすることだけは慎まなければいけないと、自分の中で確認する。

また一人で考えているだけでなく、保育後の話し合いで、困っている自分を伝える。伝えながら、母子共に見守り励まされていることを強く感じる。保育中も、何と他の保育者に助けられ、支えられていたことかと思う。その中で一人の保育者が「そうやって、葛藤があるって

ことがまたいいんだよねえ。」と言われた。そのときのその発言は、子どもの立場にとってという意味であったのかかもしれないが、私もまた、何かひとつ、私の枠をこえた大きな見方に出会つたようで、あらたな思いになつた。それまでの私は、そのような現実の場面を、子どもたちにとってマイナスの意味でしかとらえていなかつた。と思つた。だから、私自身も、自分の力のなさを責めるようになつて苦しくなつてしまつた。子どもたちにすまないという思いに身動きがとれなくなり、彼らをもまた、窮屈にしてしまつていただろう。

あるとき、私の気持ちの原点に帰ろうと、とおるにそつて一日を過ごした。それまで彼が気持ちを込めて遊んでいたものを、不意に他の大きい子に奪われた。声をあげることも泣くこともせず、からっぽになつた手許をそのままにして立つていた。そうか……この子どもがいやだつたのは、U君やT君ではない。自分の気持ちを入れ、自分自身をこめていたものを不意に、外の力で奪われる。そのことがたまらなかつたのだ。他の子どもに手

を引かれてそこを立ち去る母親も、このおもちゃと同じであった。この日以後、私の気持ちもひろがった。私の手を引かざるを得ないU君やT君の気持ちもある。とおるの気持ちもある。こうすればよい、ああすればよいといつた具体的な方法が見いだされたわけではない。ただ、そうせざるを得ない子どもの心にふれて、私の気持ちがひろがったのだ。とにかく、今はこうしてああしてと、そのつど思いつく限りの工夫をしながら、そのときそのときを迷いながら共につづけよう。そのうち、子どもたちの方が、自分たちで、この時をきりひらいていくだらう……。

(とおるの世界のひろがり)

そうこうしているうちに、つい最近のこと、とおるが「ぼくはおねえさんとあそぶから、おかあさんはおともだちとあそんで。」ときっぱり言う。すてきな実習生のお姉さんとの出会い、そしてそのお姉さんとの間で築かれているらしい楽しい生活が自信となつて、母にこ

う表明させている。着がえやおしつこ、お弁当などを気にして現れる母親に、今こんなに楽しく遊んでいるのに邪魔しないでよと言わんばかりの表情をする。一方で、とおるの心をとらえる子どもも存在するようになった。

K君は、二歳の頃からこのグループに通つてきており、来年度は養護学校の一年生になる。内面はたいそうデリケートなのだが、表現される行為は、我が道を行くという感じで、他の子どものファンも多い。他者に威圧感を与えることなく、自己の存在感をしっかりと持つている。そのK君に、畏敬の念にも似た気持ちを抱いている。グループの中で、ブランコに乗り、大きく揺すりながら「やだもん。のせないもん。」と言つてはいるK君の様子を、私と二人で行く公園で真似てみる。そして、「すごいねえー。K君みたいだねえー。」と言う。また「K君ておもしろいねえー。おもしろいけど、ちょっとこわい。」とも言う。とおるの相手をしていただいている実習生の報告でも、保育中K君の姿をみかけるとそのあとをついて行き、高い所にあるスベリ台をすべった

り、三輪車をこごうとしたり、いつもは慎重で実習生の手助けを求めるようなことや、大人からの誘いかけではなかなか入ろうとしない追いかけっこなども自分から始めようとするとのことだ。ことばや動作によるK君からの直接的働きかけがあるわけではない。ことばのレベル以前の、子どもたちの中にある共通の世界で、とおるの心が響き合っているようだ。

(子どもの背負う重荷)

とおるにひきつけられたようにやつてくる子どもたちもいる。前述のT君の場合もそうであつたが、M君の場合は、必死に激しいかたちで追い求めてきた。M君は以前このグループに在園していた子どもで、現在は地域の公立小学校の普通学級の二年生である。月一回相談に通つてきているそのM君が、学校生活で大変な時期があり、パニック状態に陥ることが多いときがあつた。園内に入ると、とおるの存在にひきつけられたようにやつてきて、正面から顔をたく。おびえて激しく泣くとおる

に、あたかも自分の激しく泣きたい気持ちを表現させているようであり、より幼い者を追いつめることにより、自分自身を追いつめていくとするような切迫感が漂つていた。他の幼い子どもたちも多くいる中で、何故、とおるだけがえらばれたのかよくわからないのだが、もしかすると直感で、一番重荷をしょっていない存在として感じられたのではないだろうか。

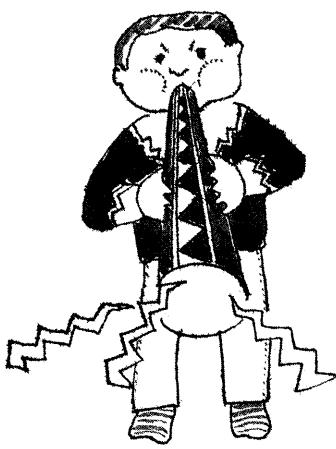
人生のごく初期の段階から、発達の遅れに対する不安・心配に、気持ちの動搖することが多いと思われる大人の中で育った子どもたちと、そのような心配は一応なく、今のひとつひとつが、希望につながり嬉しい大人の中で育った子どもは、ある意味では、今自分があることの感じられ方が異なつてくるだろうと思う。とおるの場合、子ども時代の苦労は彼なりにあつても、やはり全体として、幼いときの特權である明るさ・柔らかさ・温かさが彼を代表しているように思える。発達の遅れといった烙印を押され、重荷をしょわされた子どもたちに、「子どもは、こうであつていいんだよ。」ということを、

とおるがその存在全体で表現しているように思えるときがある。

(母親たちと話す中で)

通園している母親たちからもまた、子どもにとって、今何が大切であるか、しつかり足許をみつめる姿勢、立ち止まって今を深く掘り下げ、豊かに生きていこうとする姿勢を学ぶことが多い。

U君のお母さんは、とても知的な方である。成長のプロセスで、U君が他の子どもたちにギュウッと抱きついたり、母親をかんだりつねつたりすることが激しい時期があった。日常生活の中でU君の気がかりなことを話された後「愚痴を言って下さいません。」と言われる。U君のお母さんは、このまでよいのだろうか、いつまでこんなことがつづくのだろうかといった今を迷いながらも、放り出さず、何が子どもにとって大切であるのか、絶えず確認していらっしゃる。いろいろ話をしながら私もまた同じ幼時期にある子どもの母親として、一緒に考



え困り合う。そこに関わる母親の在り方を摸索していくことは、とりもなおさず自分の子育てに通じるものである。子育ての最中に、このような場に参加できている私は、しあわせなことだと思う。

以前の私は、子どもの側にいたいということだけが願いであったが、今は、母親にとってもという思いが強くなっている。日常生活の中で、母親にとって子どもの困った行動が目立ってしまうとき、母親自身の生活もまた大変なときなのだと思う。そのようなとき、母親一人だ

けの中でしょい込まず、心をひらいて不安や悩みを話していく。そしてその中で、少し気持ちが整理され、再び自分を支え直して子どもと出会う。同じことでも、迷つたりこれでいいんだと思つたり、その繰り返しの中で、子育ての柱ができるだろうと思う。

大変なときをのりこえていらしたU君のお母さんが「Uのことを探たち家族は結構気に入っているんです。本当に子どもに育てられてるという感じがします。でもまた、迷うことはあるでしょうけど……。」と言われた。そのことばを、私もしばらく、自分の中であたためつづけていた。

いわゆる統合教育が多数の健常児といわれる子どもたちの中に少数の障害児といわれる子どもたちを入れることに、はからずもそれとは逆の形で保育に参加することになった。

このささやかな試みを通して出会ったいろいろな体験を記しながら、母親として、同時にセラピー的要素を必

要とされる保育者として、子どもたちと生活を共にしていく中から生じた葛藤、母子でグループに参加していることの意味などについて、少し私の感情を整理してみたいと思つた。

保育の中には、楽しくしあわせなことばかりではない。社会の縮図とも思えるような予期せぬ困難に、子どもも大人も出会うことがある。とおるにしても、存在のものをおびやかされるようなこともあつた。トラブルを避けるため、しばらく休もうかと考えたときもあつた。しかしそれではいつまでも解決につながらない。関係を持ちつづけていく中で、相手に対する理解が生じ、それぞれのかかわり方も変わつてくる。子どもが困難なことに出会わないようにするのではなく、出会ったとき、どのようにのりこえていいけるか、そして大人にはどのような手助けができ、またすればよいのか、そのことが大切なのだと思う。

子どもを育てているとき、頭では理解できているように思えていることでも、そのとき起き上がつてくる感情

をどうしようもなくなることがある。そのようなとき、自分の未熟さを責めるより、現在の私もまた成長のプロセスにある人というとらえ方をしてみることで、先がひらくかれていくように感じられる。「生きていることにはすべて意味があり、それは成長につながる。」とあるときこここの先生が言わされた。そう思えるようになつてから、大人の私もずいぶん生きしていくのが楽になつた。母親が、いろいろな困難な状況を意味あることとして、自分の中にしっかりと位置づけられるようになつたとき、子どもにも意味ある体験として、生きていくことだらう。

このグループの中で、とおるがあたりまえに通過していくことに、こだわりを持つてなかなかすすめないでいる子どもに出会うとき、我が子にとってその行動の意味を立ち止まって考えるきっかけとなる。とおるの方も、母の目の届かないところで、両親とは異なる人々の世界にふれて、着実に大きな人になつていて。子どもと共にここでの保育に参加しながら、それぞれの成長のときを味わつていて。

幼い人たちとの生活の中で、私が足許のささやかなことに希望を見いだし、もつと先へもつと多くではなく、今の時に委ねながら、ひとつひとつを深く、あつく受け入れられるようになりますように……。そして、とおるが社会へ出ていくとき、幼児期のここでの様々な出会いが、弱い立場の人の側にたつて、感じたり、考えたりできる人に育てくれるだろうと楽しみにしながら、このレポートを終わろうと思う。

四月、この「児童の教育」誌編集部に
新しく大沢啓子さんをお迎えしました。

隔月の連載も、このはな児童学研究所

・安島智子先生、愛知淑徳短期大学・山

田洋子先生に書いていただけることにな
りました。臨床の現場から、又、コミュ
ニケーションを学問として専門となさる
お立場からの興味深い文章を期待してお
ります。

長坂利厚先生は、附属小学校の先生で
いらっしゃいます。四月号でもあり、
幼稚園と小学校の関連について、日頃感
じていらっしゃることを小学校の先生の
お立場から書いていただきました。

新学年がはじまりました。新しい出会い
を新しい立場を、意識して過ごす季節
ですね。我が家は、新しい土地で
いた。不思議と不安は全くなく、はじめて
の引越しという新鮮な体験を楽しんでい
ます。

(Y)

長坂利厚先生は、附属小学校の先生で
いらっしゃいます。四月号でもあり、
幼稚園と小学校の関連について、日頃感
じていらっしゃることを小学校の先生の
お立場から書いていただきました。

新学年がはじまりました。新しい出会い

を新しい立場を、意識して過ごす季節

ですね。我が家は、新しい土地で

いた。不思議と不安は全くなく、はじめて

の引越しという新鮮な体験を楽しんでい

ます。

(K)

今月号から向山さんとご一緒に編集に
参加させていただきます、大沢啓子です。

どうぞ、よろしくお願ひいたします。

最近「ぼのぼの」という漫画に凝つて

いる。主人公のラッコのぼのぼのが、幼
ない頭で「自立って何だろう」と考える。
自立できないとどうなるのか。すぐ泣い
たり、すぐ怒つたり、すぐ笑つたりしな
くなることか。友達のシマリスのように
クルミにしがみついているうちは、自立
できないのか。では持つているものを捨
てれば自立できるのか。考えれば考える
ほど深い問題だ。我が家の子ども達も考
えた。「私は喘息が治れば自立できるのか
な」「僕はおねしょをしなくなれば自立で
きるかな」大人だって自立していない人
はたくさんいる。大人であるというだけ
で、一見自立できているように見えるだ
けだ。「お父さんはタバコをやめたら自立
できるのかな」本当にそうかもしれない。
さて、私は大人の顔をして、どうすれば
自立できるのだろうか。

新学年がはじまりました。新しい出会い

を新しい立場を、意識して過ごす季節

ですね。我が家は、新しい土地で

いた。不思議と不安は全くなく、はじめて

の引越しという新鮮な体験を楽しんでい

ます。

児童の教育 第八十八巻 第四号

四月号

定価 四〇〇円

平成元年三月二十五日

印刷

平成元年四月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行人 本田和子

発行所 東京都文京区三田五ノ一二ノ一
日本幼稚園協会

東京都千代田区神田小川町三ノ一
図書印刷株式会社

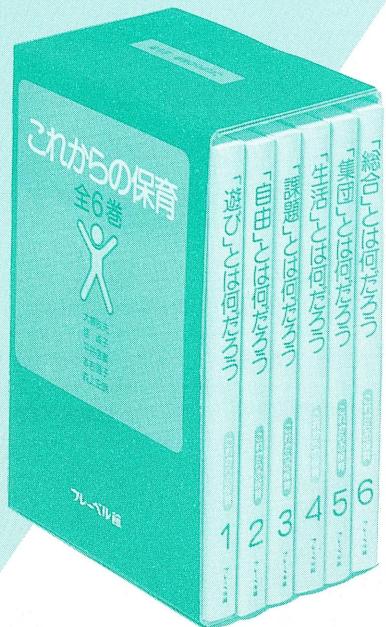
印刷所 東京都千代田区神田小川町三ノ一
株式会社 フレーべル館

発売所 振替口座東京九一一九六四〇番
TEL・二九二二一七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

これからの保育



若い先生も、ベテランの先生も、原点に立ってもう一度“保育”を考えてみませんか。基本的な問題を考えてみませんか。あなた自身“これからの保育”を確かなものとするために。

●あなたの保育を深め充実させます。

「保育」を原点にもどして考え直し、子どもたちの自主性の発達を助けたい。自由で生き生きとした保育を目指して保育者自らも高まりたい。



シリーズ「これからの保育」は、

1巻「遊び」とは何だろう	4巻「生活」とは何だろう
2巻「自由」とは何だろう	5巻「集団」とは何だろう
3巻「課題」とは何だろう	6巻「総合」とは何だろう

という命題について実践をふまえて重ねた討論から問題を提起します。

大場牧夫・海 卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗 共著

A5軽装判・各256頁・定価各1,600円・セット定価9,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

見る目を育てる実践シリーズ



一巻 「子どもを見る目」

二巻 「保育実践を見る目」

三巻 「保育計画・形態を見る目」

四巻 「保育の現在を見る目」

五巻 「問題行動と障害を見る目」

編著

森上 史朗 (日本女子大学教授)

大場 幸夫 (大妻女子短期大学教授)

吉村真理子 (松山東雲短期大学教授)

全5巻

保育の本質をしつかり把握するためには、「子どもを見る目」「保育を見る目」を養わなければなりません。

本シリーズでは、実践例を通して、わかりやすく「見る目」を解説していきます。

A5判・平均228ページ・定価各1,700円・セット定価8,500円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館